



## 宇治の文化的景観

宇治の中心部である中宇治地区は、宇治川が山地から京都盆地に流れ出す谷口にあたり、比較的浅く伏流水が流れる扇状地に立地しています。排水性と保水性を兼ね備えた砂礫質土壤で、昼夜の寒暖差があり、霧が発生しやすいという宇治の自然条件に招かれるように、平安時代には貴族により園池を伴った別荘が営まれました。また、そうした地形や地質は茶の栽培に適していたことから、室町時代以降、宇治は茶の生産・製造・流通拠点として一大ブランドを形成していきます。

中世になると別荘地時代の格子状街区を貫く宇治橋

通りが新設され、そこに茶師の屋敷群が建ち並びました。現在も宇治橋通りには茶師屋敷が残るほか、茶商や茶農家の町家も点在しています。こうした町屋の敷地は近代に茶師屋敷を短冊状に割ったものであるため奥行きが30間にも及び、正面に表屋、奥行方向に深く延びる土間に沿って製茶関連施設を配することを可能にしました。特に、大正期に開発された煉瓦造りの碾茶用乾燥炉は長さが8間にも及ぶ長大なものです。

中宇治地区は、重層的に形成された都市構造、そこで育まれてきた茶業を中心とする生業とが有機的な関連性で結ばれながら、現在も人々の営みが続けられて



## 宇治白川の茶園

茶摘み期の白川の茶園は、ほぼ全面が葦簀よしずなどで覆われる中に柿の古木が一人静かに立つ、一片の絵画を思わせます。てん茶や玉露を栽培する茶園は、よく知られる茶畑とは異なり、茶摘み期に上面を覆って遮光する覆下園（おいしたえん）という形式を持ちます。無関係に立つかに見える柿の木も、茶の生育を見守る上に欠かすことができないので、白川の茶園景観を個性的に彩っています。



いる場所です。こうした価値が評価され、2009年2月、宇治の中心部である中宇治地区とその周囲の茶畑が、「宇治の文化的景観」として国の重要文化的景観に選定されました。奈良文化財研究所では、現在、宇治の文化的景観に関わる整備活用に向けた調査と計画策定を宇治市と共同で進めています。

独自の地質・地形という強固な経糸に、古代の別荘地や中世以来の茶業が緯糸となり紡がれてきたのが宇治だとすると、私たちはその紡ぎが持続していく方法を考えていきたいと思えます。

(文化遺産部 恵谷 浩子)

## 宇治橋通りに面する茶農家の町家

上写真：茶畑から運ばれてきた茶の芽は敷地正面から搬入されます。深い底で確保された軒下空間に芽が降ろされ、一輪車で大開口の引き違い戸を通り抜けるのです。敷地奥に展開する土地利用と生業との関係は、町家の表構えにも滲みだしています。

下写真：一輪車に乗せられた芽はフラットに整えられた土間を通り奥の茶工場に運ばれます。茶工場では煉瓦造りの長大な焙炉が現役で動き、そこで最高級のてん茶（抹茶）が製造されています。